

## 論文の内容の要旨

森林科学 専攻  
平成 25 年度博士課程入学  
氏名 楊 真  
指導教員名 下村 彰男

### 論文題目 伝統的覆下茶産地における文化的景観の変遷に関する研究

2004 年 4 月 1 日に文化財保護法の一部が改正され、文化的景観が文化財の新しい類型として追加された。これは、文化的景観に関する国際的な動向を背景とした動きであった。1992 年のユネスコ世界遺産委員会において、世界遺産に文化的景観の概念が盛り込まれた後、1995 年のフィリピン・コルディレラ棚田などの遺産登録が契機となって、農村部、あるいは都市部近郊の耕作地に関連する文化的景観地が注目されるようになった。

一方、日本は長い茶栽培の歴史と深い喫茶文化を有しており、品質の良い茶を生産する各地の歴史的茶産地に存在している茶畑の景観は文化的景観として地域固有の景観資源として注目されるようになってきた。全国各地の歴史的茶産地には当初僧侶が寺院において栽培していた寺院起源と言われる茶産地があり、いくつか現存しているものがある。こうした茶産地の中には、てん茶などの高級茶を栽培するため、日本独自の茶栽培法といわれる「覆下茶栽培法」が行われている茶産地が含まれている。ワラ、竹、丸太などの地域材料を利用する伝統的覆下茶栽培法は茶にまろやかな旨味を与えるのみならず、地域に独特な景観システムを形成する。

しかし、近年生活スタイルの変化に伴う抹茶、玉露などの高級茶消費量の減少や覆下茶栽培地における茶農家の高齢化、後継者及び摘採人夫の不足などの問題が深刻化している。また、農作業の便利性・経済性を追求するため、農業技術革新、機械化の進行とともに、伝統的覆下茶栽培方法は時代遅れのものあるいは非合理的なものとして否定されてきたという問題もある。こうしたことから、今日伝統的栽培法の存続は危機に直面しており、覆下茶産地の景観が変貌しつつある。

そこで本研究は、伝統的覆下栽培地を対象として、茶畑本体を含み、茶畑を取り巻く土地利用の変遷過程を明らかにするとともに、こうした茶産地における文化的景観の保全の

あり方を考察しようとするものである。具体的には、以下のように主要な研究目的を設定する。1. 日本茶史の流れの中における覆下茶栽培法の位置付け、2. 覆下茶生産地における各空間要素の変容過程、3. 保全計画や管理制度の現状及び課題、これら三点を明らかにする。その上で、4. 以上の内容を踏まえた今後の保全あり方を検討する。以上、四点を研究目的とする。

第一章では、上記の研究背景と目的、研究の方法、具体的な調査対象地について記述するとともに、農地景観に関する既往研究のレビューを行い、本論文の位置づけと論文の構成を述べる。

第二章では、奈良・平安時代から大正時代までの日本茶栽培史の流れと、覆下栽培法の展開および変遷について、茶の歴史、技術に関する文献の整理、新聞記事の収集および関係者へのヒヤリング調査によって検討・考察し、以下のとおり整理した。

平安時代から室町時代後期に至るまで、寺院は茶の伝播や生育に重要な役割を担い、寺院茶園は主導的地位を占めていた。当時茶の薬用効果と嗜好品の性質が主眼とされ、量が少ない貴重品の茶は仏教寺院、武家社会を中心に利用された。喫した茶の形式については、平安時代は固形茶（団茶、餅茶）が、鎌倉時代は露天で栽培されたてん茶が主であった。江戸時代以降、茶が商品作物、日常消費品として栽培されるようになったことに伴い、平安時代、鎌倉時代及び室町時代に典型であった寺院茶園は重要な地位を失った。茶園の消失とともに寺院の領地に開墾された露天てん茶園はしだいに衰退した。こうして茶消費の拡大とともに茶栽培も農山村に拡大し、寺院で栽培されていた茶の品質を確保するために、覆下栽培法という革命的高級茶の栽培法が発明された。つまり、茶史や茶の技術に関する文献を調査することにより、覆下茶栽培法は江戸時代主に茶園の防霜手段として行われ、明治期後には防霜だけではなく、茶品質の向上に深く関与したことを明らかにした。昭和50年代以後、新しい材料の寒冷紗の普及とともに、作業が複雑な伝統的覆下茶栽培の利用はしだいに衰退した。そして、近年地域の歴史や個性の守りを考える際に地域性のある伝統的覆下栽培法の保全が重要であるという視点へと変化したことを明らかにした。

第三章では、まず調査対象地である宇治市と星野村の二つの地域における全体的土地利用の変遷、特に茶畑要素の変化過程を、地形図の分析をもとに明らかにした。その結果として、茶畑の変化について、宇治市では都市化とともに茶畑面積の大幅な減少が見られた。さらに昭和30年を境に、茶畑の立地と分布も大きな変化が見られた。昭和30年以前、傾斜地や微高地を含め広く分布していた茶畑は、傾斜がやや緩い集落周辺に移動した。そして、昭和30年以後、茶栽培を取り巻く社会的・経済的状況や技術的な進展を背景として、茶畑の傾斜の緩い道路沿線部分が大量に消失し、より傾斜が急なところ及び白川村のような山間地域に茶畑が継続・創出されたことが明らかとなった。一方、星野村は宇治市にお

ける茶畑面積の減少傾向と違い、昭和 50 年を境に水田から茶畑への土地利用の転換が村各地で見られた。そして、昭和 50 年以前には茶畑はほぼ標高の高いところに分布し、昭和 50 年以後高い傾斜のところを放棄し、集落の近いところへ移動する傾向があったことが明らかとなった。

さらに、茶栽培の歴史が古く現在も覆下栽培を行っている、宇治市の白川地区と星野村の小野地区を選び、地区の茶畑の変遷を辿り、「伝統的覆下栽培の茶畑」、「寒冷紗茶畑」および「露天茶畑」の三つの類型の茶畑を区分することによって、1970 年代から現在までの伝統的覆下茶畑の変化を明らかにした。その結果、白川地区と小野地区の両地域において、現代的材料を利用する寒冷紗茶畑と露天茶畑の面積が増加するとともに、栽培作業が複雑な伝統的覆下茶畑の面積が顕著に減少していることが明らかとなった。しかし、伝統的覆下茶畑の分布変化に関しては、両地域間に差異があることが明らかとなった。白川地区における伝統的覆下栽培地は次第に標高の高いところに移動した傾向が見られるが、一方の小野地区においては、傾斜が高いところに分布していた伝統的覆下茶園はしだいに寒冷紗茶畑と露天茶畑へ転換され、傾斜がやや緩い集落周辺において伝統的覆下茶園が増加している傾向が見られた。

このほか、覆下栽培を支える要素である森林、竹林及び水田の動向に着目し、覆下茶栽培地における茶畑を取り巻く環境の変遷を明らかにした。その結果、白川地区と小野地区の両者には相違点が見られた。昭和 50 年代以前、両地区の茶畑は、周辺の田や竹林、背景の森林などの要素（土地利用）と密接な関係を有していたことが示された。しかしながら昭和 50 年代以降、白川地区の茶畑は田などの周辺土地利用と次第に離れ、関係も弱くなってしまった。一方、小野地区の茶畑と水田との関係はほぼ変化せず、強いつながりを継続している。これは白川と小野の両地域における覆下茶栽培システムの変遷過程の違いと関係があることが考察された。

第四章では、対象地の宇治市と星野村における茶栽培の景観管理に関する取り組みを整理するため、両地域の景観制度や計画の内容、そして茶栽培（伝統的覆下茶栽培）や茶畑景観に対する保全対策についての比較を行い、各々の特徴や差異を明らかにした。その結果、地域景観に関する取り組みについて、文化的景観・日本遺産に登録され、世界遺産の登録に申請している宇治市では多様な取り組みや活動が展開されているが、茶畑の保全に関して、茶産地全体を景観的面から重視しているにもかかわらず、景観保全計画の中に覆下栽培法に関わる周囲の土地利用要素を考慮せず、茶畑そのものだけを重要な要素として取りあげていることが明らかになった。一方、星野村については地域景観に関する取り組みや活動は宇治より控えているが、茶栽培や茶畑の保全について、国の地理的表示保護制度（GI）に登録したため、伝統的な本玉露に関わる栽培条件の整理を行っており、こうし

た技術的面の保全方法により、結果的には、単なる茶畑だけではなく茶畑を取り巻く周辺の環境も含めて保全することに結びついていることが明らかになった。

上記を踏まえ、宇治市の茶畑景観保全に対する意識は強いが、それは茶畑を景観要素とした保存であり、茶栽培を支えてきたシステム全体の保存にはいたっていない。一方、星野では、茶の品質を維持するため、栽培システムの保全を目的としており、伝統的な茶栽培を支える諸要素やその関係を保全することになっている。しかし、それらが表出する景観としての注目は十分ではない。つまり、宇治市は「景観上に強い保全」、星野村は「技術上に強い保全」を目指していると言えよう。この両方面のいずれかに偏りすぎても、覆下茶栽培地における文化的景観の保全としては片面的になってしまい、目に見える景観と背後を支える覆下茶栽培システムが乖離する問題が発生しやすいと考えられる。

伝統的覆下茶産地の文化的景観は、単に茶畑が広がる景観のみを指すのではなく、良質な茶生産を支えてきた栽培方法や技術の歴史を読み取れる特徴の維持と表現も欠かせないと考えられる。そのため、伝統的覆下茶産地の文化的景観の保全については、茶畑とその周辺の水田、竹林や森林等の要素を一つの全体として捉える必要があると考えられる。また、伝統的覆下茶栽培のシステムにおける要素間の相互関係も重視しなければならない。

第五章では、本論文を総括し、伝統的覆下栽培地に対する保全のあり方の検討を行った。最後は、今後の研究として、寺院茶の歴史を有する茶産地の空間構造の特徴解明に関する次の課題について述べた。